決闘者御一行、遊戯王ZEXALへ。

ワンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
決闘者御一行、遊戯王ＺＥＸＡＬへ。

【Ｎコード】
Ｎ５０６９Ｚ

【作者名】
ワンダー

【あらすじ】
大会帰りにどういう訳か「遊戯王ＺＥＸＡＬ」の世界に迷い込んでしまった高校生５人。彼らは元居た世界に帰るために奮闘する。しかし世界は、彼らは次第に「Ｎｏ．」を巡る戦いに巻き込まれる。果たして彼らは無事に元居た世界へ帰ることができるのか！？

Standby Phase

「いやー三位入賞とは惜しかったな江藤っち」
「むしろ【カエル】で三位まで行けたのは凄いと思うんだが」
「サガだって二位だったじゃん。やっぱ回るね【シューティングスター】は」
「お前……それは特に活躍できなかった俺らに対する当てつけか？」
「そんな『一位しか視野に入ってません』みたいな言い方ムカツクわぁ……」
「ちっとは敗者を労りやがれ」
「相手が悪かったろうよお前ら三人は。【デッキ破壊】に【図書エクゾ】に【フルバーン】じゃしゃーねーよ」
「【図書エクゾ】とか大会だとほぼ絶滅危惧種だぜ。貴重な体験だったと思っときなよ」

夕方の電車の中。
私服姿の高校生五人が、会話をしながら楽しげに笑う。
彼らが話しているのは、『遊戯王デュエルモンスターズ』というカードゲーム。
ＫＯＮＡＭＩから発売されている、日本原産の世界的カードゲームの一つである。
勿論、それは日本でも人気があり、一年を通して様々な場所でＫＯＮＡＭＩ公認・非公認を問わず大会が開かれている。
彼ら五人も、今日開催されたデュエルモンスターズの大会に参加した帰りである。
たった五人しかいない田舎路線の電車の中、今日の大会の事を思いだし会話を重ねる。

対戦相手の使ったデッキ。自分のうっかりでやってしまったプレイミス。初手の手札で事故を起こしたこと。切り札を召喚し勝負を決めたこと。
様々な事を彼らは話し、笑った。
だが、その表情にはどこか悲しげな物も混ざっている。

「はぁーしかし、今日で一旦遊戯王とはお別れか」
「しゃーねーよ。俺らもう受験生だ。大学入試が終わってからまたやればいいさ」
「俺ら志望校も一緒だしな」
「端から見たら仲良すぎて引くレベルだと思うぞ俺ら」
「これで一人だけ落ちたら洒落にならないぜぃ」

そう、現在彼らは高校二年生。そして、今の季節は冬。
彼らの通っている高校は進学校であり、学年主任の教師からは何度も何度も学年の集会で『今は大学受験への大事な時期だ！』と口うるさく言われている。
あくまで学生の本業は勉学。流石にカードゲームにかまけて大学に落ちたのでは洒落にならない。
そう思い彼らは今日参加した大会を最後に、大学受験が終わるまで遊戯王デュエルモンスターズを封印しようと決めたのである。

彼ら五人は、全員が全員そう付き合いが長い訳ではない。
幼稚園来の幼なじみもいれば、中学で知り合った者、また高校に入学して知り合った者と様々。
だが彼ら五人は、他の面子との関係は何かと聞かれれば、迷い無く『親友』と答える。

それほどまでに、彼らの仲はいい。
そして、彼ら五人を結びつけたのは、『遊戯王デュエルモンスターズ』だ。
彼ら五人にとって、『遊戯王デュエルモンスターズ』とはそれほどまでに特別な物だ。

だから彼らは、『遊戯王デュエルモンスターズ』を一時的に辞める事にした。
また五人で、笑って遊戯王をするために。

「お、もう着いたのか」

彼らの内の一人が気が付いたようにそう言った。
見ると、既に彼ら五人が降りる駅へと電車は着いたようだ。
彼らは自分のカードの入った鞄を持って電車を降りた。

「なんか、コレで家帰ったらしばらくこのデッキともお別れと思うと寂しくなるな」

彼らの内の一人は、しみじみとそう言った。

「ま、一生できない訳じゃねーよ」
「でも新しいパック発売されたらちょっと揺らぐかも」
「オイ馬鹿ヤメロ」

「裏切る気かテメェ」

ウリウリと彼らはじゃれながら階段を下りる。
だが、顔に出さないだけで、その寂しさは全員が感じていた。
やはり、物心付いた頃からふれあってきた思い入れのあるカードゲームだ。
それを一年とは言え辞めるのには決心が必要だった。

だが、仕方ない。自分たちは学生なのだから。
受験に落ちて、沈んだ心で決闘（デュエル）をしても楽しくはない。
そう思って、五人は階段を下りた。

だが、それは偶然なのか、はたまた必然なのかそれは定かではないが。
この後僅か数秒後、彼ら五人は数奇な運命に巻き込まれる事となる。

彼ら五人は、そんな寂しさを抱えながら、自宅へと帰宅するためその駅の北口へ出た。
そこで彼らの目に飛び込んできたのは、彼らの住む少し寂れた田舎と都会の中間地点のような街並みではなく、

どこか近未来を思わせるような、彼らの住む町とはほど遠い光景だった。

「へ？」
「は？」
「うん？」
「あれ？」
「あ〝ぁ？」

三者三様ならぬ五者五様の反応で、彼らは驚きを表した。
当然であろう。彼らの住む町、と言うか現代日本では見ることはないような街並みが目の前に広がってるんだから。

「……降りる駅、間違えたか？」
「そんな訳無いだろ」
「てか、何処で間違えたらこんな所に来るんだ？」
「とりあえず戻ろうか？」
「そうだ、今さっき俺ら降りてきたばっか……」

そう言って、彼らは今出てきた駅に戻ろうと振り返った。
が、そこで愕然とした。
彼らの後ろにあったのは、先程降りてきた自動改札もないような寂れた駅ではなく、街並みにふさわしい近未来的なデザインの真新しい駅だったのだから。

そして彼らは驚愕で気づいていないが、すぐ側にある駅の案内板にはこう書かれている。

『現在位置：ハートランドシティステーション・北口』と。

ここは『遊戯王ＺＥＸＡＬ』の世界。

そしてその舞台、『ハートランドシティ』。

笹垣（ささがき）　悠（ゆう）。
江藤（えとう）　一（はじめ）。
山辺（やまべ）　良介（りょうすけ）。
石崎（いしざき）　琢磨（たくま）。
成田（なりた）　孝太郎（こうたろう）。

彼ら五人が『遊戯王デュエルモンスターズ』を離れるのは、まだまだ先の事になりそうだ。

TURN－1

「……一体何が起こってるって言うんだ……」
「その問いに誰が答えられると思う？」
「……そりゃそうか」

はぁ、と誰ともなく溜め息を吐いた。
駅前の公園、五人の高校生がベンチに一列に並んで項垂れていた。
行き交う人々は遠巻きに彼らをチラリと見ては顔を引きつらせて通り過ぎていく。
それほどまでに、彼らの放つ負のオーラは凄まじかった。

「えーっと……まず状況を整理しよう」

五人の面子の中で唯一メガネを掛けている少年『山辺　良介』が場を仕切るように話を切り出す。

「俺らは電車を降りていつもの駅に着いた」
「そうだな」
「で、雑談しながら階段降りた」
「あってるな」
「それで、全員で北口へ出たらハートランドだった……と」
「……状況を整理して、この現状が変わるのか山っちー？」

少し茶髪の掛かった髪の少年『成田　孝太郎』が自分の髪をかき上げながら、グダグダと状況を説明する良介をたしなめる。
普段の彼はとても人なつっこく、他の四人を『～っち』と愛称で呼ぶが、その普段の元気も今はしおれローテンションとなっている。

「……本当に、『ハートランドシティ』なんだな、ココ」
「そうらしいな。俺は『ＺＥＸＡＬ』殆ど見てなかったからよくわからんけど」

呆然としたように呟いたのは、黒い帽子（ハット）を被った少年『石崎　琢磨』。
その呟きにぶっきらぼうに返したのが、片目が前髪で隠れているのが特徴の『江藤　一』である。

そう、琢磨が呟いた通り彼ら五人は、どうやら彼らが元居た所とは違う世界に迷い込んでしまったらしい。
そして、彼らを何より驚かせたのは、彼らが今居る街の名前である。
『ハートランドシティ』。
そこは何を隠そう、彼らも愛好している『遊戯王デュエルモンスターズ』を題材にしたアニメシリーズの四作品目『遊戯王ＺＥＸＡＬ』の舞台なのだ。
ソレを知った彼らは呆然とした。
アニメの世界に迷い込むなど一度は体験してみたい出来事なのだろうが、それは身の安全と帰りの足が保証されていればの話だろう。
だが彼らは唐突に、身一つでいきなり頼れる宛も知り合いもいない所に放り出されたのだ。そんな状況を喜べるわけがない。
幸いにして、彼らは少しばかり遠出をした帰りにこの世界に迷い込

んだので、金は多少なりとも所持していたが、高校生の所持金などたかが知れていた。
そんな状況を何となく理解していても何をすればいいか分からない彼らは、こうして公園のベンチに座ってボーッとしているのだ。

「……よしっ！」

ふと、ベンチの一番右端に座っていた少年がその言葉と共に勢いよく立ち上がった。
彼ら五人の内の最後の一人、『笹垣　悠』である。

「こんなところで何時までも座ってたって仕方ない。とりあえず行動しようぜ」
「……サガ、んな事言ったってなぁ……」
「親にも友達にも携帯は通じない。所持金は心許ないし、頼れるツテもない。そんな状況なのに何をしろってんだよ？」
「正直やる気でねぇよ」

悠は意気込んだように言うが、他の四人はそれにやる気のない反応を返す。

「それでも動かないと駄目だろ。いつ帰れるか分からないのにずっとここに居るつもりか？　むしろ高校生五人が何日もベンチで動かずにいたら怪しいだろ。それこそ職務質問でアウトだ」
「うっ……」

「それはまぁ、確かに……」
「俺たちは受験も控えてるんだし、帰らなきゃ行けないだろ？　俺はこの五人全員で元の世界に帰りたい。その為には帰れるようになるまでの生活の準備とか必要だろ」
「……まぁ、『遊戯王』の世界なんて死亡イベント満載の世界だしな」
「それは主要キャラクターに関わらなければ大丈夫だろ。ていうかそんな危険な物がゴロゴロ転がっててたまるか」
「でもよぉ、一体何すればいいってんだよ？　何をするにしたって俺たちそんなに金持ってないし……」
「そう、それだ」

琢磨の『金がない』発言に、悠が反応する。

「行動するにはまず資金、金が必要だ。だが今俺たちの手元にある金を合計してもだいたい五万円くらしかない。それじゃあ飯代だけですぐ底をつく」
「じゃあバイトでもするのか？　でも今の俺らじゃ履歴書もろくに書けないぞ」
「いや、バイトはしない。もっと効率の良い方法で稼ぐ」

一のバイト案をあっさり否定し、悠はニヤリと笑う。

「みんな忘れたか？　俺たちは大会帰りにこの世界に来ちまった。ソレが幸いして、俺らはデッキを複数持ってるし、トレード用のカードをそれなりの数持ってきている」

「うん……」
「そりゃあな」
「でも、それが一体なんだって……あぁ、なるほど」
「お、良介は分かったみたいだな」
「も～なんだよぉ！　もったいぶらずさっさと言えよ笹っち～！」

煮えを切らした孝太郎が少しだけイライラしながら悠に尋ねる。
悠はそんな孝太郎に笑顔で言った。

「この世界じゃ、カード一枚がとんでもない位の価値を持ってるんだぜ？

「よし、じゃあみんな成果を言ってくれ」

一時間後、一旦別行動となった五人は再び先程までたむろしていた駅前の公園に集まっていた。
各々その手に、それなりの厚みの封筒を持って。

「まさか『サイコ・ショカー』が二十万になるなんて……」
「なんで『逆転の女神』が三十万なんだよ……誰が使うんだ……

…？」
「『エルフの剣士』と『暗黒騎士ガイア』が合わせて八十万だった……王様か？　王様が使ったからか？」
「『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』なんて百二十万だった……店長さん顔を青くしながら泣いて喜ぶなんて言う器用なコトしてたさ……」
「ほう、孝太郎の『レッドアイズ』が一番、良介の『逆転の女神』が二番か」
「何でそんなあっさりしてるのさ笹っち！　俺札束なんて持つの初めてだからすげぇ挙動不審になっちまったさ！」

半泣きになりながら孝太郎は悠に食い掛かる。
大金を手にする機会などほとんど無い高校生の彼らがいきなり十万単位の現金を手にすれば当然だろう。

「しっかし本当に稼いじまうとは……」
「いきなり二百三十万とか……ちょっとした年収だぞこれ」
「なんか今現在汗水垂らして働いてる人たちに全力で謝りたい……」

琢磨と一の二人は手元にある封筒の厚みにただただ呆けていた。

「それで、サガの結果はどうだったんだ？」

メガネの位置を直しながら、良介は悠に尋ねる。

「俺か？　『バスター・ブレーダー』と『炎帝テスタロス』が合わせて四十万だ。……流石にこの値段には驚いた」
「普通じゃ考えられないレートだもんな……」

良介の問いに悠は口の端を引きつらせながら答えた。
実際に行動を指示した彼だったが、ここまで高額だとは思いもしなかったらしい。

「サガのと合わせて二百七十万か……ちょっと心許ないが、確かに激しく散財しなけりゃ五人で一年弱くらいは大丈夫そうか？」
「あんまり一気に売ると、レアカードハンターとかに狙われそうだしなぁ……頃合いを見つつ小出しにして売ればいいんじゃないか？」
「てかこの世界にもグールズもどきとかいるんさ？」
「で、どうするんだサガ？　この金で安いアパートでも借りるのか？」
「ん？　あぁ、生活資金は俺が別にカードを売って換金したぜ。勿論、怪しまれないように一件ずつ違う見せ回ったりしてな」
「え？　そうなの？」
「じゃあこの金は何に使うんだ？」
「この世界のデュエルは、俺たちの考えてるデュエルとは勝手が違うんだぜ？　この世界では、何よりデュエルが重要になってくる。
――――アニメ遊戯王と言ったら、必要なモノがあるだろ？」

「うぉおぅ……」
「これが……」
「デュエルディスク……」
「この世界だと、正確には『D・パッド』だけどな」

そこから更に数十分後。
彼らの腕には一つの機械が装着されていた。
『D・パッド』。
それは、遊戯王ZEXALにおいてデュエルディスクの役割を持つ重要なものである。
これが、彼らの元居た世界とこの世界のデュエルの大きな違いと言えるだろう。
『ソリットヴィジョン・システム』という立体映像を使っての迫力あるデュエル。
それがアニメ遊戯王の魅力であり、彼らの世界の決闘者(デュエリスト)の夢であった。
そんな憧れとも言える機械を手にし、彼ら五人は興奮した様子で『D・パッド』をまじまじと見る。

「この世界のデュエルは、『D(コレ)・パッド』が無いと話にならないからな。話が通らなくても、最悪デュエルでごり押しできる」
「なるほど……」
「パニクりすぎててそんな発想にたどり着かなかったな」
「一台あたりそんなに値段張らなかったし、すこし余裕でてきたんじゃないか？」
「あぁ、思っていたほどの出費にはならなかったな。じゃあこれから、衣食住の『住』を決めに行くとしよう」

そう言って悠は鞄を手に立ち上がる。
一と琢磨も、悠に続こうとベンチから立つ。

「あー、俺いいや。みんなに任せるぜぃ」

そんな中、一人ベンチに座ったままだった孝太郎が、手をヒラヒラと振りながらそう言った。

「さっき歩き回って疲れちまったぜぃ。ちょっと俺は休憩って事でココにステイしてるわ」
「……はぁ、しゃあない。お前がそんな感じなのはいつものことだしな」
「さすが笹っち。俺の事分かってるぜぃ」
「じゃあ良介、お前も残ってくれ。一人残して行くのは流石に不安だ」
「……分かった。気い付けて行ってこいよ」
「いってらっさーい」

住処を探しに行くことになった三人は、孝太郎のそんな様子に内心そろってやれやれと苦笑と共に首を振り、物件を探しに行った。

「よかったのか孝太郎？　一緒に部屋探しに行かなくて。お前なら嬉々として選びに行くもんだと思ってたんだが」

「うんにゃ。確かにちょっと気になるけど、流石の孝太郎さんも疲れたぜ。今のこの世界の時間は午後三時ちょっと。でも俺らはこの世界に来る前に遠出までして夕方まで大会に赴いてたんだぜ？　むしろ俺は何でみんながそんなにタフなのか知りたいぜぃ」
「う……なんか意識し出すと急に疲労が……」
「にゃはははは。やっぱり山っちも似た様なものか」

疲れを意識し顔をしかめた良介の表情を見て、孝太郎は楽しそうに笑った。
その時、

「おい」

不意に、良介と孝太郎の二人に声がかけられた。

「ここは俺のベンチだぜ。さっさとどきな」

二人は、自分たちの真正面に立つ声の主に目を向けた。
そして、

「ぶっ！？」
「だはっ！？」

同時に吹き出した。

二人に威圧的な態度で声を掛けてきたのは、取り巻きを引き連れ特徴的な髪型をした人物。

「それとも、この俺をシャーク様と知っててやってんのか？」

その人物の名は神代凌牙。

『遊戯王ＺＥＸＡＬ』の主要キャラクターの一人であった。

TURN－1　（後書き）

笹垣悠【？？？】【？？？】【？？？】
江藤一【？？？】【？？？】【？？？】
山辺良介【？？？】【？？？】【？？？】
石崎琢磨【？？？】【？？？】【？？？】
成田孝太郎【？？？】【？？？】【？？？】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5069z/

決闘者御一行、遊戯王ZEXALへ。

2011年12月17日08時52分発行